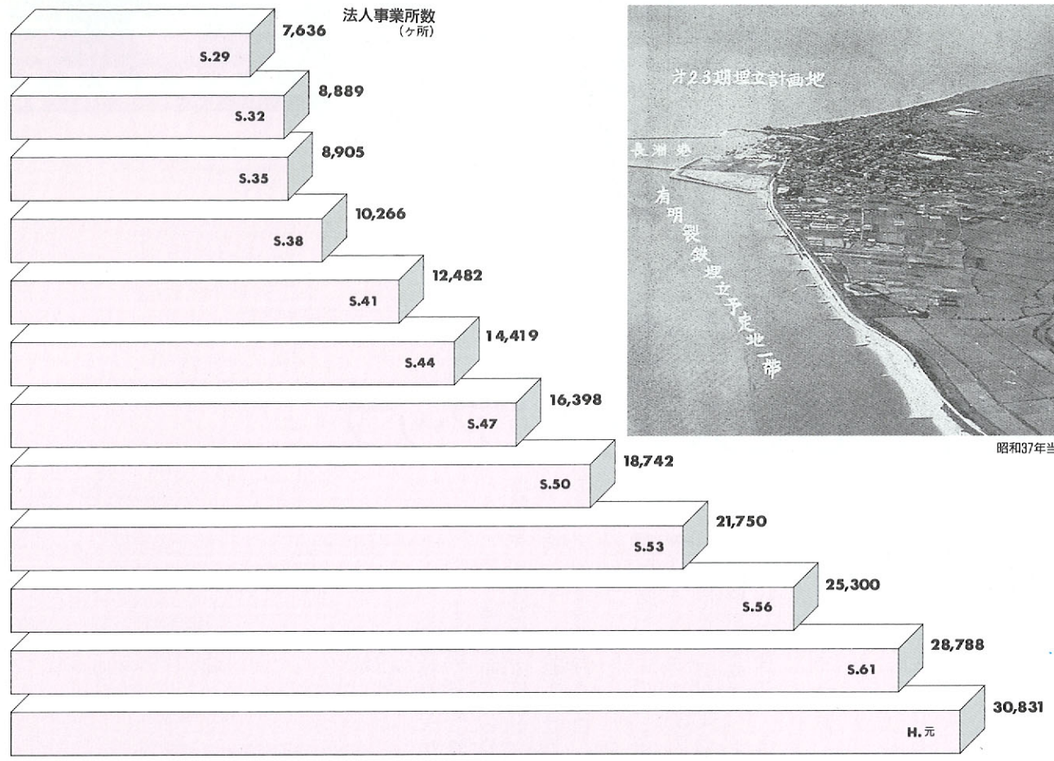
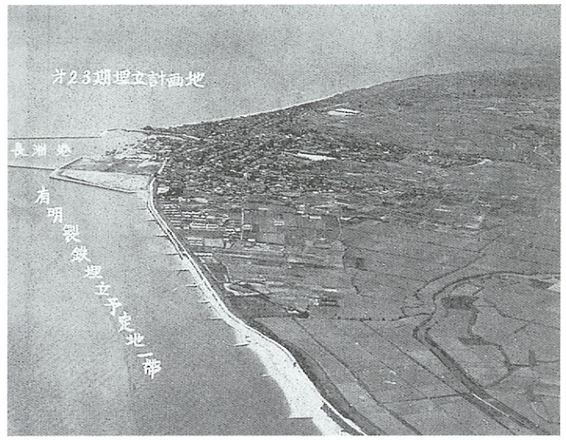
臨海工業地域の整備から テクノポリス計画へ





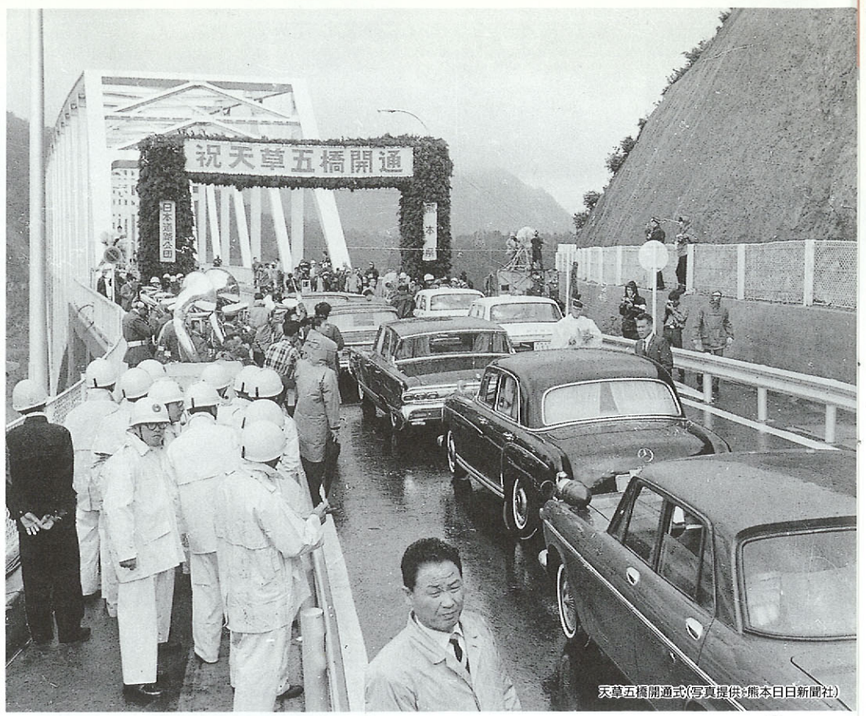
昭和37年当時の有明臨海工業地帯

昭和三十七年、有明臨海工業地帯建設局が設置されました。上の写真は当時の有明臨海工業地帯です。高度経済成長のただ中にあって、県民所得の増大、県経済の発展、雇用拡大が叫ばれ、工場の誘致、育成が積極的に進められていた頃。その中で重工業も誘致できる各種の条件を満たした、臨海工業地帯の造成が急がれていたのです。そして数年後、この熊本県初の臨海工業用地に日立造船有明工場の進出が決定しました。

下の写真は昭和五十九年から整備されてきたテクノリサーチパーク。先端技術産業を核に産・学・住の機能がバランスよく整備された潤いと活力のあるまちづくり―テクノポリス計画の研究開発拠点です。現在計画の中核的施設であるテクノポリスセンター、憩いの場中央緑地公園などが完成し、企業の研究施設の立地も進んでいます。

高度情報化社会の現代。地域の商工業は、誘致企業と手を携えながら地域の資源、人材を生かした振興が図られています。

テクノリサーチパーク（中央緑地公園。奥がテクノポリスセンター）



天草五橋開通式（写真提供：熊本日日新聞社）

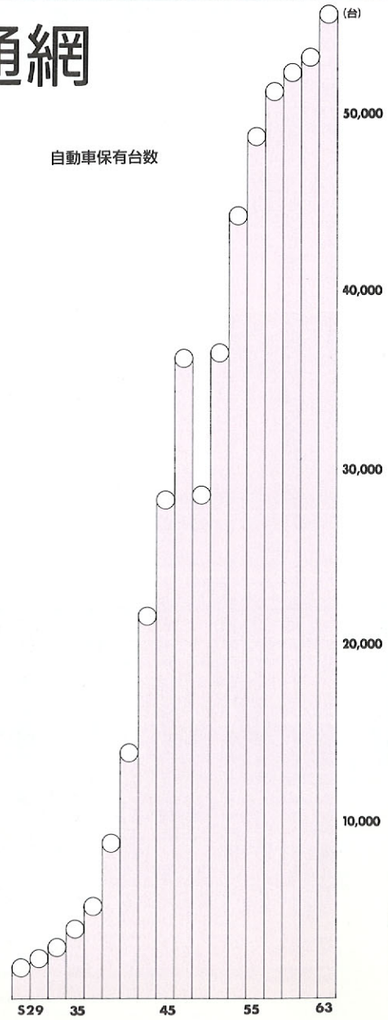
昭和四十一年九月二十四日、台風襲来の中で行われた天草五橋の開通式（写真上）。四年二ヶ月の歳月を費やした大工事で宇土半島、大矢野島、上島が結ばれ、天草は離島暮しの不便さから解放されました。それまで困難だった果樹、野菜、魚などの輸送量が増える、時間が短縮される、価格が下がる……。道路の整備が地域の人々の暮しに多大に貢献し、産業や経済にも影響を及ぼすことを示しました。

下の写真は新しくなった熊本空港国内線ターミナルビル。利用客の増加にともない、今年一月に増改築されたものです。これまで飛行機の到着が重なった場合、二機までしか使えなかった搭乗ブリッジが三機まで対応できるようになったり、売店やレストランが拡充されるなど、九州の拠点空港に向けて機能の充実が図られました。

郷土の発展を支える交通体系は、高速化する社会の流れを見据えて、陸に、空にと絶ゆまぬ前進を続けています。

高速化する時代に応える交通網

今年1月にオープンした新空港ターミナルビル



復興し、発展の道を歩んだ熊本県の戦後の歴史をふり返ってきましたが、もちろんそのすべてを紹介し尽くすことはできません。そして、ここで紹介した一つ一つの出来事にしても、それを支えた数々の歴史がその奥にあります。数えきれないほどの人々の努力が連綿と受け継がれて、今の熊本があるのです。私たちはそのことに感謝し、次代の人々へ、私たちの素晴らしい熊本を伝えていきたいと思います。